

2025(令和7)年度 入学試験問題

東大・医進クラス 2月1日 PM

国語

注意

- (1) 指示があるまで表紙を開かないこと。
- (2) 問題および解答用紙の両方に受験番号・座席番号を記入すること。
- (3) 声を出して読まないこと。
- (4) 解答は全て解答用紙の所定の欄に記入すること。

受験番号	
座席番号	

解答用紙の受験番号欄は、1マスに1つずつ数字を記入してください。

※問いに字数指定がある場合は、句読点なども一字として数えます。

【一】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

午後四時。外は、まだずいぶん明るくて、グラウンドからは野球部の掛け声が、中庭からはトランペットの音色が響いている。作業を開始してまだ十分しか経っていないこともあって、その時教室にはまだ、朱里も含めた応援旗係全員が顔をそろえていた。

そんな時、それは起こった。

「あ」

ぼつ、と目の前で鮮やかな赤色の絵の具がしぶきのように散ったのと、松村さんが短い悲鳴を上げたのは、どっちが先だったんだろう。

——嘘。

気づいた時には、背景の空の上に、赤い絵の具が点々と散っていた。拭きとる間もなく、赤い絵の具はすうっと吸いこまれるようにシミになっていく。目の前には、赤く染まった筆をパレットに置いて、青ざめた顔をした松村さんの姿があった。

「ごめん！ ごめんなさい……」

一瞬、しん、と静まり返った教室の中で、だれよりも先に声を上げたのは、松村さん本人だった。今にも泣きだしそうな顔で、「どうしようどうしよう」とうろたえている。

実際、これはまずいかも、というのは、私自身も思ってしまったことだった。

上から塗り直したって、背景の色が薄いぶん、どうしても派手な赤色のほうが浮き出てしまう。ごまかそうとしても、かえって悪目立ちしてしまいそうだ。だけど今は、涙目になっている松村さんを責める気にはなれなかった。

大丈夫だよ、なんとかなるよ——。

そうフォローの言葉を口にした。けれど、その時だった。

「えー、超目立つじゃん。どうすんの？ これ」

ロコツな物言いにぎよつと顔を上げると、さっきまで手持ちぶさたにしていた朱里が、すぐそばに立っていた。きれいに整った眉をひそめて、応援旗を見下ろしている。

「あ、でも、上から塗り直せば……」

おずおずと、百井くんが言いかける。

けれどそれを朱里は、「や、そこだけ塗り直しても、かえって目立つでしょ」とあつさり一蹴した。その一言に、松村さんはさらに耳を

真っ赤にして、「ごめんなさい……」とうつむいてしまう。しおりが手を当てた松村さんの肩は、すでに、泣きだす寸前のように小さく震えている。

①——なんで？ 朱里……。

思わず隣をふりあおぐと、朱里はもう他人事みたいにつまらなそうにそっぽを向いていた。

その瞬間、私の中で、何かが弾けた。

「朱里」

口を開くと、思ったよりも低い声が出て自分でも驚いた。

朱里が、おつくうそうに首をもたげて私を見る。その視線にひるみそうになったけれど、私は、構わずに口を開く。

「……なんで、そういう言い方するの。それに、ずっとサボってたじゃん、朱里。こんな時だけ責めるのって、おかしいよ」

②言った。言ってしまった。

水を打ったような静けさの中で、カッン、と時計の針が動く音がした。しおりの、そして百井くと松村さんの視線をひりひりと肌を感じる。怖い。怖くてたまらない。

「……何ソレ。なんであたしが、悪者みたいになってんの？」

抑揚のない声で言って、朱里がカバンをつかむ。そしてポニーテールを揺らして、私をまっすぐに見た。少し前まで「葉！」と笑いかけられていた、勝ち気な猫みたいな瞳。でも今そこにあるのは、以前のような親しみじゃなかった。

「日向」と「日陰」の境界線。それを朱里がたった今、私の前に、完全に引いたことが、はつきりと分かった。

「……もういい。帰る」

そう吐き捨てると、ふり向きもせず、朱里は足早に歩いていってしまった。③その背中を視線だけで追いかけながら、私は、そっと目をふせる。

泣きたかった。

だけど、泣かない、と思った。

だって、私は今、朱里に本当の気持ちを言った。そのことに、後悔はなかったから。

ゆつくりと深呼吸してふり向くと、しおりと最初に目が合った。心配そうなそのまなざしに、大丈夫だよ、というふうに、私はうなずいてみせる。

「佐古さん……ごめんなさい。私のせいで」

目を赤くした松村さんに、私はうん、と首をふった。それは、本当の気持ちだった。

「……だけど、どうしようか。これ」

と百井くんがつぶやいて、私たちは改めて、赤く散らばったシミを見下ろした。淡い色が混じり合った幻想的な空の中に、点々と散った鮮やかな赤。たしかに、そこだけ見れば、違和感はある。だけど、なんて鮮やかなんだろう。

そう思った時、ぴんと心にひらめくものがあつた。そうだ、初めてしおりと出会った日、私たちの間を吹き抜けていった風と、ひらめく花びらと――。

「……花」

ぼつんとこぼした私のつぶやきに、三人が、いつせいに顔を上げる。

「花？」

首をかしげるしおりに、私は大きくうなずいた。

「そう。隠すんじゃないくて、デザインの一部にするのってどうかな。空に花びらが舞ってるようなイメージで全体に描きたして。そして、遠目からでも華やかに見えるし……」

そこまで言った時、みんなの視線が私に集まっているのを感じて、はっとした。遅ればせながら恥ずかしくなって、かっとながほてる。どうしよう。もしかして、おかしいことを言ってしまっただろうか――。

けれど、その時。

「いいと思う。すぐく」

え、とまばたきをする私の前で、しおりがまっすぐ私にほほえみかけて言った。

「やろうよ、それ」

四人で頭をくつつけるようにして、空に、たくさんの花びらを描いた。そうして少しずつ暮れていく教室の中で、私たちは、今まででいちばん、お互いのことをしゃべったと思う。

松村さんが吹奏楽部でホルンを吹いていること。最近、小学生の妹が生意気になって困ってるってこと。そんなことも、初めて知った。「生意気なのに、やっぱりかわいくて。くやしいけど」と、照れくさそうに笑う松村さんは、教室では見たことのない、「お姉さん」の顔をしていた。

百井くんは、あまり自分のことを話そうとはしなかったけれど、私たちの話にのんびりうなずいたりあいつちを打ってくれたりした。

そのおだやかな横顔は、クラスの騒々しい男子たちとは、まるで雰囲気がちがう。そのせいだろうか、男子が苦手なはずのしおりまで、百井くんとはごく自然に言葉を交わしている。そのことに、びっくりした。

「瀬川さんは、将来、画家になるの？」

教室に差し込む光に夕暮れの色が混じり始めたころ、百井くんが、ふいにそう言った。

「……なんで？」

唐突な質問だったからだろう、ささやくように答えたしおりの頬が、さっと赤くなった。

「え。だって、いつも休み時間に絵、描いてるから。だから、そうなのかなって」

ごく当たり前のように、のんびりと笑って、百井くんは言った。

その言葉に、はっとする。今まで考えたこともなかったけれど、そういえば、百井くんは昼休みにどこで何をしているんだろう、と思つて、でも全然、思い浮かばない。そんなことさえ思い出せないぐらい、ごく近い、目の前の出来事しか自分には見えてなかったんだと思つて、ふいに恥ずかしくなった。

「……なりたいて、思つてはいる、けど」

やがてしおりが恥ずかしそうにそうつぶやくと、「うわあ、やっぱりそうなんだ」と、百井くんはうれしそうに、明るい声を上げて笑つた。その声にしおりはいっそう顔を赤くして、「私、水換えてくるね」と、にこった色水のバケツを片手に、そそくさと立ち上がる。しおりが教室を出ていったところで、「あの……」と松村さんが、遠慮がちに私のほうに顔を向けた。

「なに？」

「うん。ただ、佐古さんと瀬川さんって仲よかったんだなって。ちよつと意外だったから、その、びっくりして……」
 ごによごによとそう言ってから、松村さんはあわてたように、「あ、でも悪い意味じゃなくて！ むしろいい意味で！」と、言葉をついだ。

「なんだか、見えて、本当の友達って感じがするから。だから、いいなって」

⑤ その一言に、驚いた。境界線を越えることが、私はずっと怖かった。「日向」からはみ出そうとすることは、とがめられても仕方ないことなんだって、そう思っていた。だけど、いいな、と松村さんは言ってくれた。心を込めて。

「うん。小学校が一緒で。その時から……親友で」

親友、という言葉を使つていいのか、しおりが今もそう思ってくれているのか、それは私には分からない。でも、そうだったらいい。そう思つて、私は言った。

「へえ、いいなあ。そういう友達」
 百井くんが間のひした声で言^いって、のんびりと笑う。私はうなずいて、応援旗に目を落とす。
 花びらの舞う空の中を、悠々と泳いでいく大きなクジラ。
 どこにでも行けそうな自由さが、その絵からは伝わってくる。
 私もいつか、そんなふうに、なれるだろうか――。
 そう胸の内ですばやいたら、教室に差し込む夕陽が、かすかに目にしみた。

(水野瑠見『十四歳日和』による)

問一 線A～Cの本文中の意味として最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- A 手持ちぶさたに
 ア 気だるそうに
 イ 楽しそうに
 ウ 関係なさそうに
 エ 退屈そうに
- B おつくうそうに
 ア めんどくさそうに
 イ 怖がつている様子で
 ウ 悲しそうに
 エ 怒っている様子で

C 間のびした声で

- ア 興味がなさそうな声で
 イ 緊張感のない声で
 ウ 満足そうな声で
 エ いたずらっぽい声で

問二 線①「――なんで? 朱里……。」とありますが、この時の「私」の様子を説明したものとして最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 何とかして失敗を取りつくりおうとする松村さんや百井くんに対して、語気を強めるばかりで手伝いもしない朱里の姿を見てもう少し優しくできないのかと腹をたてている。
 イ 応援旗を作ろうと一生懸命になっている松村さんや百井くんを前に一向に応援旗作りに協力的な姿勢を見せることができない朱里に対して、哀れみを感じている。
 ウ 負い目を感じている松村さんやそれを手助けしようとする百井くんに対して、寄り添うどころか余計に責めるような言動をした朱里に対して理解できない思いでいる。
 エ 応援旗を仕上げようと慌てている松村さんやアドバイスをしている百井くんにいちいち反論する朱里に対して、余計なことをするものだと思わない気持ちでいる。

問三 線②「言った。言ってしまった。」とありますが、このときの「私」の心情を説明したものとして最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 今まで自分のことを見下すような態度を取っていた朱里に対して、やっと自分の本音を伝えることができた満足している。
 イ 松村さんたちをかばうような発言をしたことで、今後は松村さんたちと仲良くしなければならないことに不安を感じている。
 ウ 自分は朱里と松村さんたちのやりとりを見ていただけに、突然意見をしまったことに恥ずかしさを覚えている。
 エ 友人である朱里にひるまず発言をすることはできたが、このことで朱里との関係にひびが入るのではないかとおそれている。

問四 ――線③「その背中を視線だけで追いかけるが、私は、そつと目をふせる。」とありますが、この時の「私」の心情を説明したものと最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 朱里と決別してしまったことはつらいが、朱里を責める気持ちに嘘はないので耐えようとしている。
- イ 他人を見下す朱里と仲良くしていたことを後悔し、もうこれ以上朱里の味方になれないと思っている。
- ウ 普段と違う朱里の様子が心配で追いかけたかったが、朱里を追うと自分も作業に戻れないのではないかと不安を感じている。
- エ 旗作りへの意見は的確でも作業に非協力的な朱里の姿を見て、自分は朱里のような口だけの人間になるまいと決心している。

問五

a

 に入る文として最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 応援旗のシミは、きつとなんとかしてみせる。
- イ 朱里が帰ったら作業でなくなっちゃう。
- ウ 私と朱里が衝突したのは、絶対に、松村さんのせいじゃない。
- エ うまくいかないのは、朱里と松村さんがケンカしたからだ。

問六 ――線④「みんなの視線が私に集まっているのを感じて、はっとした。」とありますが、どういうことですか。その説明として最も適切なものを次のア～エから選び記号で答えなさい。

- ア 自分の頭の中で考えていたことを口に出しているつもりはなかったのに、無意識に言葉を発していたことが恥ずかしくなったということ。
- イ 旗作りの良い考えが浮かび、そのイメージを得意げに語っていたが、話している途中で自分の考えの欠点に思い当たったということ。
- ウ 思いついたアイデアに自信がなくなればそぼそと話していたが、思いのほかみんなが納得したように聞いてくれて嬉しくなったということ。
- エ 自分の中に湧き上がってきたイメージを、周囲の反応を気にすることなくひとりで夢中になって話していたことに気づいたということ。

問七 ――線⑤「その一言に、驚いた。境界線を越えることが、私はずっと怖かった。」について、次の問いに答えなさい。

(i) 「境界線」とは「日向」と「日陰」の境界線のことを指しますが、本文中の「日向」と「日陰」を説明したものと最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 「日向」は恵まれた環境のことを意味し、「日陰」は恵まれない環境のことを意味する。
- イ 「日向」は目立ちやすいグループのことを意味し、「日陰」は目立つことが少ないグループのことを意味する。
- ウ 「日向」は太陽光があたる場所のことを意味し、「日陰」は物にさえぎられて日のあたらない場所のことを意味する。
- エ 「日向」は世間から注目されることを意味し、「日陰」は世間から全く注目されないことを意味する。

(ii) 「その一言に、驚いた。」とありますが、どうしてですか。「私」の考えの変化がわかるように、次の文を完成させる形で説明しなさい。

「私」はいままで

1

 と考えていたため、

2

 が無かったが、本当の友達と考える人と過ごせるなら

3

 と気づかされたから。

問八 本文の内容や表現の説明として適切なものを次のア～オから二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「鮮やかな赤色の絵の具」「淡い色が混じり合った幻想的な空の中に、点々と散った鮮やかな赤」「教室に差し込む光に夕暮れの色が混じり始めたころ」のように色にまつわる描写が多く視覚的な効果を上げている。
- イ 登場人物たちのセリフが多用されることによって、「私」だけでなくみんなの内面までもが浮き彫りになり、お互いが抱えている思いを想像させる効果がある。
- ウ 「勝ち気な猫みたいな瞳」「お姉さん」の顔「おだやかな横顔」のように、顔の様子だけで人物像を把握することができる。
- エ 「――嘘。」や「……何ソレ。」のように「――」や「……」が使われることで、物語が暗い展開になっていくことを予想させている。
- オ 「私」はしおりのことを親友だと思っているが、しおりも同じように思ってくれているのか自信が持てなかった。

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

アマゾンの電子本リーダー「Kindle」が発売されたのが二〇〇七年。その意外な成功にあわてたアップルが二〇一〇年に電子本リーダーをかねるタブレット（書板）型の携帯パソコン「iPad」を発表し、日本でも新聞や週刊誌が「電子本元年」とさかんに書きたてた。しかしこの報道のしかたは厳密にいえばまちがいです。電子本の原型は二十世紀の七〇年代にすでにアメリカで実現されていた。日本でも九〇年代になると、フロッピーディスクやCDやインターネット経由で、かなりの量の電子本が流通していたのですから、いくらなんでも「元年」ということはない。

ただし、いちおう流通はしていたが、そのおおくは無料だったし（たとえば「青空文庫」、大手出版社が売りだした『新潮文庫の一〇〇冊』などの有料CD本にしても、よく売れたとは到底いいがたい。それやこれやで、ほとんどの人や企業が「電子本はまだ当分はビジネスになるまい」と考えるようになったところ、Kindleの成功によって、にわかに電子本を商品として売るメドがついた。したがって正確には、^①あれは「電子本」ではなく「電子ビジネス」の「元年」というべきだったのです。

そしてさらにいうならば、たしかに商品化の元年ではあったけれども、そのことで私たちの生活に電子本を日常的に読む習慣が根づくまでにはいたらなかった。おとろえたとはいえ、慣れ親しんだ〈紙の本〉への信頼はまだしぶとく生きつづけている。そういうことだったのでしょう。（A）

いや、じつさいには〈紙〉にかぎらないのです。〈紙の本〉以前にも、歴史的に見れば紀元前四千年紀のメソポタミアの〈粘土の本〉にはじまり、古代インドの〈木の葉の本〉、エジプトやギリシャの〈パピルスの本〉、中国の〈竹の本〉や〈絹の本〉、中東やヨーロッパの〈獣皮の本〉など、さまざまな形態の本が存在した。したがって正しくは、それらのすべてをひっくるめて、

――さまざまな時代、さまざまな土地の人びとが、身近な自然物の平たい表面に、テキストや画像をノミや尖筆や墨その他のインキで物理的に定着させ、それを巻いたり綴じたりしたものの。

それが、というか、それこそが人類にとつての本だったのです。そしてその流れのはてに、おそらくは八世紀ごろの中国で植物性の紙をもちいた〈紙の本〉が出現する。本書で言及した本でいえば、『源氏物語』（手写）から『好色一代男』（木版）や『学問のすゝめ』（木版十活版）や円本（活版）をへて現在まで、そのすべてがこの〈紙の本〉時代の産物だったことはことわるまでもないでしょう。

そして、これら多様な本のすべてに共通して、読む者の信頼をささえてきたのが〈定着〉という特性です。

I テキストや画像を

このようなものとしての本を読む時代が五千年以上もつづいたのち、二十一世紀の冒頭にそれとはまったく異質な本が、とつぜん大量販売用の商品としてのすがたをあらわした。手写や印刷ではなく、テキストを明滅する光の点として携帯可能な小型コンピュータの画面に

表示する本。表示するだけです。定着はしないし、できない。それが電子本なのです。

② ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㏀ ㏁ ㏂ ㏃ ㏄ ㏅ ㏆ ㏇ ㏈ ㏉ ㏊ ㏋ ㏌ ㏍ ㏎ ㏏ ㏐ ㏑ ㏒ ㏓ ㏔ ㏕ ㏖ ㏗ ㏘ ㏙ ㏚ ㏛ ㏜ ㏝ ㏞ ㏟ ㏠ ㏡ ㏢ ㏣ ㏤ ㏥ ㏦ ㏧ ㏨ ㏩ ㏪ ㏫ ㏬ ㏭ ㏮ ㏯ ㏰ ㏱ ㏲ ㏳ ㏴ ㏵ ㏶ ㏷ ㏸ ㏹ ㏺ ㏻ ㏼ ㏽ ㏾ ㏿ 㐀 㐁 㐂 㐃 㐄 㐅 㐆 㐇 㐈 㐉 㐊 㐋 㐌 㐍 㐎 㐏 㐐 㐑 㐒 㐓 㐔 㐕 㐖 㐗 㐘 㐙 㐚 㐛 㐜 㐝 㐞 㐟 㐠 㐡 㐢 㐣 㐤 㐥 㐦 㐧 㐨 㐩 㐪 㐫 㐬 㐭 㐮 㐯 㐰 㐱 㐲 㐳 㐴 㐵 㐶 㐷 㐸 㐹 㐺 㐻 㐼 㐽 㐾 㐿 㑀 㑁 㑂 㑃 㑄 㑅 㑆 㑇 㑈 㑉 㑊 㑋 㑌 㑍 㑎 㑏 㑐 㑑 㑒 㑓 㑔 㑕 㑖 㑗 㑘 㑙 㑚 㑛 㑜 㑝 㑞 㑟 㑠 㑡 㑢 㑣 㑤 㑥 㑦 㑧 㑨 㑩 㑪 㑫 㑬 㑭 㑮 㑯 㑰 㑱 㑲 㑳 㑴 㑵 㑶 㑷 㑸 㑹 㑺 㑻 㑼 㑽 㑾 㑿 㒀 㒁 㒂 㒃 㒄 㒅 㒆 㒇 㒈 㒉 㒊 㒋 㒌 㒍 㒎 㒏 㒐 㒑 㒒 㒓 㒔 㒕 㒖 㒗 㒘 㒙 㒚 㒛 㒜 㒝 㒞 㒟 㒠 㒡 㒢 㒣 㒤 㒥 㒦 㒧 㒨 㒩 㒪 㒫 㒬 㒭 㒮 㒯 㒰 㒱 㒲 㒳 㒴 㒵 㒶 㒷 㒸 㒹 㒺 㒻 㒼 㒽 㒾 㒿 㓀 㓁 㓂 㓃 㓄 㓅 㓆 㓇 㓈 㓉 㓊 㓋 㓌 㓍 㓎 㓏 㓐 㓑 㓒 㓓 㓔 㓕 㓖 㓗 㓘 㓙 㓚 㓛 㓜 㓝 㓞 㓟 㓠 㓡 㓢 㓣 㓤 㓥 㓦 㓧 㓨 㓩 㓪 㓫 㓬 㓭 㓮 㓯 㓰 㓱 㓲 㓳 㓴 㓵 㓶 㓷 㓸 㓹 㓺 㓻 㓼 㓽 㓾 㓿 㔀 㔁 㔂 㔃 㔄 㔅 㔆 㔇 㔈 㔉 㔊 㔋 㔌 㔍 㔎 㔏 㔐 㔑 㔒 㔓 㔔 㔕 㔖 㔗 㔘 㔙 㔚 㔛 㔜 㔝 㔞 㔟 㔠 㔡 㔢 㔣 㔤 㔥 㔦 㔧 㔨 㔩 㔪 㔫 㔬 㔭 㔮 㔯 㔰 㔱 㔲 㔳 㔴 㔵 㔶 㔷 㔸 㔹 㔺 㔻 㔼 㔽 㔾 㔿 㕀 㕁 㕂 㕃 㕄 㕅 㕆 㕇 㕈 㕉 㕊 㕋 㕌 㕍 㕎 㕏 㕐 㕑 㕒 㕓 㕔 㕕 㕖 㕗 㕘 㕙 㕚 㕛 㕜 㕝 㕞 㕟 㕠 㕡 㕢 㕣 㕤 㕥 㕦 㕧 㕨 㕩 㕪 㕫 㕬 㕭 㕮 㕯 㕰 㕱 㕲 㕳 㕴 㕵 㕶 㕷 㕸 㕹 㕺 㕻 㕼 㕽 㕾 㕿 㖀 㖁 㖂 㖃 㖄 㖅 㖆 㖇 㖈 㖉 㖊 㖋 㖌 㖍 㖎 㖏 㖐 㖑 㖒 㖓 㖔 㖕 㖖 㖗 㖘 㖙 㖚 㖛 㖜 㖝 㖞 㖟 㖠 㖡 㖢 㖣 㖤 㖥 㖦 㖧 㖨 㖩 㖪 㖫 㖬 㖭 㖮 㖯 㖰 㖱 㖲 㖳 㖴 㖵 㖶 㖷 㖸 㖹 㖺 㖻 㖼 㖽 㖾 㖿 㗀 㗁 㗂 㗃 㗄 㗅 㗆 㗇 㗈 㗉 㗊 㗋 㗌 㗍 㗎 㗏 㗐 㗑 㗒 㗓 㗔 㗕 㗖 㗗 㗘 㗙 㗚 㗛 㗜 㗝 㗞 㗟 㗠 㗡 㗢 㗣 㗤 㗥 㗦 㗧 㗨 㗩 㗪 㗫 㗬 㗭 㗮 㗯 㗰 㗱 㗲 㗳 㗴 㗵 㗶 㗷 㗸 㗹 㗺 㗻 㗼 㗽 㗾 㗿 㘀 㘁 㘂 㘃 㘄 㘅 㘆 㘇 㘈 㘉 㘊 㘋 㘌 㘍 㘎 㘏 㘐 㘑 㘒 㘓 㘔 㘕 㘖 㘗 㘘 㘙 㘚 㘛 㘜 㘝 㘞 㘟 㘠 㘡 㘢 㘣 㘤 㘥 㘦 㘧 㘨 㘩 㘪 㘫 㘬 㘭 㘮 㘯 㘰 㘱 㘲 㘳 㘴 㘵 㘶 㘷 㘸 㘹 㘺 㘻 㘼 㘽 㘾 㘿 㙀 㙁 㙂 㙃 㙄 㙅 㙆 㙇 㙈 㙉 㙊 㙋 㙌 㙍 㙎 㙏 㙐 㙑 㙒 㙓 㙔 㙕 㙖 㙗 㙘 㙙 㙚 㙛 㙜 㙝 㙞 㙟 㙠 㙡 㙢 㙣 㙤 㙥 㙦 㙧 㙨 㙩 㙪 㙫 㙬 㙭 㙮 㙯 㙰 㙱 㙲 㙳 㙴 㙵 㙶 㙷 㙸 㙹 㙺 㙻 㙼 㙽 㙾 㙿 㚀 㚁 㚂 㚃 㚄 㚅 㚆 㚇 㚈 㚉 㚊 㚋 㚌 㚍 㚎 㚏 㚐 㚑 㚒 㚓 㚔 㚕 㚖 㚗 㚘 㚙 㚚 㚛 㚜 㚝 㚞 㚟 㚠 㚡 㚢 㚣 㚤 㚥 㚦 㚧 㚨 㚩 㚪 㚫 㚬 㚭 㚮 㚯 㚰 㚱 㚲 㚳 㚴 㚵 㚶 㚷 㚸 㚹 㚺 㚻 㚼 㚽 㚾 㚿 㜀 㜁 㜂 㜃 㜄 㜅 㜆 㜇 㜈 㜉 㜊 㜋 㜌 㜍 㜎 㜏 㜐 㜑 㜒 㜓 㜔 㜕 㜖 㜗 㜘 㜙 㜚 㜛 㜜 㜝 㜞 㜟 㜠 㜡 㜢 㜣 㜤 㜥 㜦 㜧 㜨 㜩 㜪 㜫 㜬 㜭 㜮 㜯 㜰 㜱 㜲 㜳 㜴 㜵 㜶 㜷 㜸 㜹 㜺 㜻 㜼 㜽 㜾 㜿 㝀 㝁 㝂 㝃 㝄 㝅 㝆 㝇 㝈 㝉 㝊 㝋 㝌 㝍 㝎 㝏 㝐 㝑 㝒 㝓 㝔 㝕 㝖 㝗 㝘 㝙 㝚 㝛 㝜 㝝 㝞 㝟 㝠 㝡 㝢 㝣 㝤 㝥 㝦 㝧 㝨 㝩 㝪 㝫 㝬 㝭 㝮 㝯 㝰 㝱 㝲 㝳 㝴 㝵 㝶 㝷 㝸 㝹 㝺 㝻 㝼 㝽 㝾 㝿 㞀 㞁 㞂 㞃 㞄 㞅 㞆 㞇 㞈 㞉 㞊 㞋 㞌 㞍 㞎 㞏 㞐 㞑 㞒 㞓 㞔 㞕 㞖 㞗 㞘 㞙 㞚 㞛 㞜 㞝 㞞 㞟 㞠 㞡 㞢 㞣 㞤 㞥 㞦 㞧 㞨 㞩 㞪 㞫 㞬 㞭 㞮 㞯 㞰 㞱 㞲 㞳 㞴 㞵 㞶 㞷 㞸 㞹 㞺 㞻 㞼 㞽 㞾 㞿 㟀 㟁 㟂 㟃 㟄 㟅 㟆 㟇 㟈 㟉 㟊 㟋 㟌 㟍 㟎 㟏 㟐 㟑 㟒 㟓 㟔 㟕 㟖 㟗 㟘 㟙 㟚 㟛 㟜 㟝 㟞 㟟 㟠 㟡 㟢 㟣 㟤 㟥 㟦 㟧 㟨 㟩 㟪 㟫 㟬 㟭 㟮 㟯 㟰 㟱 㟲 㟳 㟴 㟵 㟶 㟷 㟸 㟹 㟺 㟻 㟼 㟽 㟾 㟿 㠀 㠁 㠂 㠃 㠄 㠅 㠆 㠇 㠈 㠉 㠊 㠋 㠌 㠍 㠎 㠏 㠐 㠑 㠒 㠓 㠔 㠕 㠖 㠗 㠘 㠙 㠚 㠛 㠜 㠝 㠞 㠟 㠠 㠡 㠢 㠣 㠤 㠥 㠦 㠧 㠨 㠩 㠪 㠫 㠬 㠭 㠮 㠯 㠰 㠱 㠲 㠳 㠴 㠵 㠶 㠷 㠸 㠹 㠺 㠻 㠼 㠽 㠾 㠿 㡀 㡁 㡂 㡃 㡄 㡅 㡆 㡇 㡈 㡉 㡊 㡋 㡌 㡍 㡎 㡏 㡐 㡑 㡒 㡓 㡔 㡕 㡖 㡗 㡘 㡙 㡚 㡛 㡜 㡝 㡞 㡟 㡠 㡡 㡢 㡣 㡤 㡥 㡦 㡧 㡨 㡩 㡪 㡫 㡬 㡭 㡮 㡯 㡰 㡱 㡲 㡳 㡴 㡵 㡶 㡷 㡸 㡹 㡺 㡻 㡼 㡽 㡾 㡿 㢀 㢁 㢂 㢃 㢄 㢅 㢆 㢇 㢈 㢉 㢊 㢋 㢌 㢍 㢎 㢏 㢐 㢑 㢒 㢓 㢔 㢕 㢖 㢗 㢘 㢙 㢚 㢛 㢜 㢝 㢞 㢟 㢠 㢡 㢢 㢣 㢤 㢥 㢦 㢧 㢨 㢩 㢪 㢫 㢬 㢭 㢮 㢯 㢰 㢱 㢲 㢳 㢴 㢵 㢶 㢷 㢸 㢹 㢺 㢻 㢼 㢽 㢾 㢿 㣀 㣁 㣂 㣃 㣄 㣅 㣆 㣇 㣈 㣉 㣊 㣋 㣌 㣍 㣎 㣏 㣐 㣑 㣒 㣓 㣔 㣕 㣖 㣗 㣘 㣙 㣚 㣛 㣜 㣝 㣞 㣟 㣠 㣡 㣢 㣣 㣤 㣥 㣦 㣧 㣨 㣩 㣪 㣫 㣬 㣭 㣮 㣯 㣰 㣱 㣲 㣳 㣴 㣵 㣶 㣷 㣸 㣹 㣺 㣻 㣼 㣽 㣾 㣿 㤀 㤁 㤂 㤃 㤄 㤅 㤆 㤇 㤈 㤉 㤊 㤋 㤌 㤍 㤎 㤏 㤐 㤑 㤒 㤓 㤔 㤕 㤖 㤗 㤘 㤙 㤚 㤛 㤜 㤝 㤞 㤟 㤠 㤡 㤢 㤣 㤤 㤥 㤦 㤧 㤨 㤩 㤪 㤫 㤬 㤭 㤮 㤯 㤰 㤱 㤲 㤳 㤴 㤵 㤶 㤷 㤸 㤹 㤺 㤻 㤼 㤽 㤾 㤿 㥀 㥁 㥂 㥃 㥄 㥅 㥆 㥇 㥈 㥉 㥊 㥋 㥌 㥍 㥎 㥏 㥐 㥑 㥒 㥓 㥔 㥕 㥖 㥗 㥘 㥙 㥚 㥛 㥜 㥝 㥞 㥟 㥠 㥡 㥢 㥣 㥤 㥥 㥦 㥧 㥨 㥩 㥪 㥫 㥬 㥭 㥮 㥯 㥰 㥱 㥲 㥳 㥴 㥵 㥶 㥷 㥸 㥹 㥺 㥻 㥼 㥽 㥾 㥿 㦀 㦁 㦂 㦃 㦄 㦅 㦆 㦇 㦈 㦉 㦊 㦋 㦌 㦍 㦎 㦏 㦐 㦑 㦒 㦓 㦔 㦕 㦖 㦗 㦘 㦙 㦚 㦛 㦜 㦝 㦞 㦟 㦠 㦡 㦢 㦣 㦤 㦥 㦦 㦧 㦨 㦩 㦪 㦫 㦬 㦭 㦮 㦯 㦰 㦱 㦲 㦳 㦴 㦵 㦶 㦷 㦸 㦹 㦺 㦻 㦼 㦽 㦾 㦿 㧀 㧁 㧂 㧃 㧄 㧅 㧆 㧇 㧈 㧉 㧊 㧋 㧌 㧍 㧎 㧏 㧐 㧑 㧒 㧓 㧔 㧕 㧖 㧗 㧘 㧙 㧚 㧛 㧜 㧝 㧞 㧟 㧠 㧡 㧢 㧣 㧤 㧥 㧦 㧧 㧨 㧩 㧪 㧫 㧬 㧭 㧮 㧯 㧰 㧱 㧲 㧳 㧴 㧵 㧶 㧷 㧸 㧹 㧺 㧻 㧼 㧽 㧾 㧿 㨀 㨁 㨂 㨃 㨄 㨅 㨆 㨇 㨈 㨉 㨊 㨋 㨌 㨍 㨎 㨏 㨐 㨑 㨒 㨓 㨔 㨕 㨖 㨗 㨘 㨙 㨚 㨛 㨜 㨝 㨞 㨟 㨠 㨡 㨢 㨣 㨤 㨥 㨦 㨧 㨨 㨩 㨪 㨫 㨬 㨭 㨮 㨯 㨰 㨱 㨲 㨳 㨴 㨵 㨶 㨷 㨸 㨹 㨺 㨻 㨼 㨽 㨾 㨿 㩀 㩁 㩂 㩃 㩄 㩅 㩆 㩇 㩈 㩉 㩊 㩋 㩌 㩍 㩎 㩏 㩐 㩑 㩒 㩓 㩔 㩕 㩖 㩗 㩘 㩙 㩚 㩛 㩜 㩝 㩞 㩟 㩠 㩡 㩢 㩣 㩤 㩥 㩦 㩧 㩨 㩩 㩪 㩫 㩬 㩭 㩮 㩯 㩰 㩱 㩲 㩳 㩴 㩵 㩶 㩷 㩸 㩹 㩺 㩻 㩼 㩽 㩾 㩿 㪀 㪁 㪂 㪃 㪄 㪅 㪆 㪇 㪈 㪉 㪊 㪋 㪌 㪍 㪎 㪏 㪐 㪑 㪒 㪓 㪔 㪕 㪖 㪗 㪘 㪙 㪚 㪛 㪜 㪝 㪞 㪟 㪠 㪡 㪢 㪣 㪤 㪥 㪦 㪧 㪨 㪩 㪪 㪫 㪬 㪭 㪮 㪯 㪰 㪱 㪲 㪳 㪴 㪵 㪶 㪷 㪸 㪹 㪺 㪻 㪼 㪽 㪾 㪿 㫀 㫁 㫂 㫃 㫄 㫅 㫆 㫇 㫈 㫉 㫊 㫋 㫌 㫍 㫎 㫏 㫐 㫑 㫒 㫓 㫔 㫕 㫖 㫗 㫘 㫙 㫚 㫛 㫜 㫝 㫞 㫟 㫠 㫡 㫢 㫣 㫤 㫥 㫦 㫧 㫨 㫩 㫪 㫫 㫬 㫭 㫮 㫯 㫰 㫱 㫲 㫳 㫴 㫵 㫶 㫷 㫸 㫹 㫺 㫻 㫼 㫽 㫾 㫿 㬀 㬁 㬂 㬃 㬄 㬅 㬆 㬇 㬈 㬉 㬊 㬋 㬌 㬍 㬎 㬏 㬐 㬑 㬒 㬓 㬔 㬕 㬖 㬗 㬘 㬙 㬚 㬛 㬜 㬝 㬞 㬟 㬠 㬡 㬢 㬣 㬤 㬥 㬦 㬧 㬨 㬩 㬪 㬫 㬬 㬭 㬮 㬯 㬰 㬱 㬲 㬳 㬴 㬵 㬶 㬷 㬸 㬹 㬺 㬻 㬼 㬽 㬾 㬿 㭀 㭁 㭂 㭃 㭄 㭅 㭆 㭇 㭈 㭉 㭊 㭋 㭌 㭍 㭎 㭏 㭐 㭑 㭒 㭓 㭔 㭕 㭖 㭗 㭘 㭙 㭚 㭛 㭜 㭝 㭞 㭟 㭠 㭡 㭢 㭣 㭤 㭥 㭦 㭧 㭨 㭩 㭪 㭫 㭬 㭭 㭮 㭯 㭰 㭱 㭲 㭳 㭴 㭵 㭶 㭷 㭸 㭹 㭺 㭻 㭼 㭽 㭾 㭿 㮀 㮁 㮂 㮃 㮄 㮅 㮆 㮇 㮈 㮉 㮊 㮋 㮌 㮍 㮎 㮏 㮐 㮑 㮒 㮓 㮔 㮕 㮖 㮗 㮘 㮙 㮚 㮛 㮜 㮝 㮞 㮟 㮠 㮡 㮢 㮣 㮤 㮥 㮦 㮧 㮨 㮩 㮪 㮫 㮬 㮭 㮮 㮯 㮰 㮱 㮲 㮳 㮴 㮵 㮶 㮷 㮸 㮹 㮺 㮻 㮼 㮽 㮾 㮿 㯀 㯁 㯂 㯃 㯄 㯅 㯆 㯇 㯈 㯉 㯊 㯋 㯌 㯍 㯎 㯏 㯐 㯑 㯒 㯓 㯔 㯕 㯖 㯗 㯘 㯙 㯚 㯛 㯜 㯝 㯞 㯟 㯠 㯡 㯢 㯣 㯤 㯥 㯦 㯧 㯨 㯩 㯪 㯫 㯬 㯭 㯮 㯯 㯰 㯱 㯲 㯳 㯴 㯵 㯶 㯷 㯸 㯹 㯺 㯻 㯼 㯽 㯾 㯿 㰀 㰁 㰂 㰃 㰄 㰅 㰆 㰇 㰈 㰉 㰊 㰋 㰌 㰍 㰎 㰏 㰐 㰑 㰒 㰓 㰔 㰕 㰖 㰗 㰘 㰙 㰚 㰛 㰜 㰝 㰞 㰟 㰠 㰡 㰢 㰣 㰤 㰥 㰦 㰧 㰨 㰩 㰪 㰫 㰬 㰭 㰮 㰯 㰰 㰱 㰲 㰳 㰴 㰵 㰶 㰷 㰸 㰹 㰺 㰻 㰼 㰽 㰾 㰿 㱀 㱁 㱂 㱃 㱄 㱅 㱆 㱇 㱈 㱉 㱊 㱋 㱌 㱍 㱎 㱏 㱐 㱑 㱒 㱓 㱔 㱕 㱖 㱗 㱘 㱙 㱚 㱛 㱜 㱝 㱞 㱟 㱠 㱡 㱢 㱣 㱤 㱥 㱦 㱧 㱨 㱩 㱪 㱫 㱬 㱭 㱮 㱯 㱰 㱱 㱲 㱳 㱴 㱵 㱶 㱷 㱸 㱹 㱺 㱻 㱼 㱽 㱾 㱿 㲀 㲁 㲂 㲃 㲄 㲅 㲆 㲇 㲈 㲉 㲊 㲋 㲌 㲍 㲎 㲏 㲐 㲑 㲒 㲓 㲔 㲕 㲖 㲗 㲘 㲙 㲚 㲛 㲜 㲝 㲞 㲟 㲠 㲡 㲢 㲣 㲤 㲥 㲦 㲧 㲨 㲩 㲪 㲫 㲬 㲭 㲮 㲯 㲰 㲱 㲲 㲳 㲴 㲵 㲶 㲷 㲸 㲹 㲺 㲻 㲼 㲽 㲾 㲿 㳀 㳁 㳂 㳃 㳄 㳅 㳆 㳇 㳈 㳉 㳊 㳋 㳌 㳍 㳎 㳏 㳐 㳑 㳒 㳓 㳔 㳕 㳖 㳗 㳘 㳙 㳚 㳛 㳜 㳝 㳞 㳟 㳠 㳡 㳢 㳣 㳤 㳥 㳦 㳧 㳨 㳩 㳪 㳫 㳬 㳭 㳮 㳯 㳰 㳱 㳲 㳳 㳴 㳵 㳶 㳷 㳸 㳹 㳺 㳻 㳼 㳽 㳾 㳿 㴀 㴁 㴂 㴃 㴄 㴅 㴆 㴇 㴈 㴉 㴊 㴋 㴌 㴍 㴎 㴏 㴐 㴑 㴒 㴓 㴔 㴕 㴖 㴗 㴘 㴙 㴚 㴛 㴜 㴝 㴞 㴟 㴠 㴡 㴢 㴣 㴤 㴥 㴦 㴧 㴨 㴩 㴪 㴫 㴬 㴭 㴮 㴯 㴰 㴱 㴲 㴳 㴴 㴵 㴶 㴷 㴸 㴹 㴺 㴻 㴼 㴽 㴾 㴿 㵀 㵁 㵂 㵃 㵄 㵅 㵆 㵇 㵈 㵉 㵊 㵋 㵌 㵍 㵎 㵏 㵐 㵑 㵒 㵓 㵔 㵕 㵖 㵗 㵘 㵙 㵚 㵛 㵜 㵝 㵞 㵟 㵠 㵡 㵢 㵣 㵤 㵥 㵦 㵧 㵨 㵩 㵪 㵫 㵬 㵭 㵮 㵯 㵰 㵱 㵲 㵳 㵴 㵵 㵶 㵷 㵸 㵹 㵺 㵻 㵼 㵽 㵾 㵿 㶀 㶁 㶂 㶃 㶄 㶅 㶆 㶇 㶈 㶉 㶊 㶋 㶌 㶍 㶎 㶏 㶐 㶑 㶒 㶓 㶔 㶕 㶖 㶗 㶘 㶙 㶚 㶛 㶜 㶝 㶞 㶟 㶠 㶡 㶢 㶣 㶤 㶥 㶦 㶧 㶨 㶩 㶪 㶫 㶬 㶭 㶮 㶯 㶰 㶱 㶲 㶳 㶴 㶵 㶶 㶷 㶸 㶹 㶺 㶻 㶼 㶽 㶾 㶿 㷀 㷁 㷂 㷃 㷄 㷅 㷆 㷇 㷈 㷉 㷊 㷋 㷌 㷍 㷎 㷏 㷐 㷑 㷒 㷓 㷔 㷕 㷖 㷗 㷘 㷙 㷚 㷛 㷜 㷝 㷞 㷟 㷠 㷡 㷢 㷣 㷤 㷥 㷦 㷧 㷨 㷩 㷪 㷫 㷬 㷭 㷮 㷯 㷰 㷱 㷲 㷳 㷴 㷵 㷶 㷷 㷸 㷹 㷺 㷻 㷼 㷽 㷾 㷿 㸀 㸁 㸂 㸃 㸄 㸅 㸆 㸇 㸈 㸉 㸊 㸋 㸌 㸍 㸎 㸏 㸐 㸑 㸒 㸓 㸔 㸕 㸖 㸗 㸘 㸙 㸚 㸛 㸜 㸝 㸞 㸟 㸠 㸡 㸢 㸣 㸤 㸥 㸦 㸧 㸨 㸩 㸪 㸫 㸬 㸭 㸮 㸯 㸰 㸱 㸲 㸳 㸴 㸵 㸶 㸷 㸸 㸹 㸺 㸻 㸼 㸽 㸾 㸿 㹀 㹁 㹂 㹃 㹄 㹅 㹆 㹇 㹈 㹉 㹊 㹋 㹌 㹍 㹎 㹏 㹐 㹑 㹒 㹓 㹔 㹕 㹖 㹗 㹘 㹙 㹚 㹛 㹜 㹝 㹞 㹟 㹠 㹡 㹢 㹣 㹤 㹥 㹦 㹧 㹨 㹩 㹪 㹫 㹬 㹭 㹮 㹯 㹰 㹱 㹲 㹳 㹴 㹵 㹶 㹷 㹸 㹹 㹺 㹻 㹼 㹽 㹾 㹿 㺀 㺁 㺂 㺃 㺄 㺅 㺆 㺇 㺈 㺉 㺊 㺋 㺌 㺍 㺎 㺏 㺐 㺑 㺒 㺓 㺔 㺕 㺖 㺗 㺘 㺙 㺚 㺛 㺜 㺝 㺞 㺟 㺠 㺡 㺢 㺣 㺤 㺥 㺦 㺧 㺨 㺩 㺪 㺫 㺬 㺭 㺮 㺯 㺰 㺱 㺲 㺳 㺴 㺵 㺶 㺷 㺸 㺹 㺺 㺻 㺼 㺽 㺾 㺿 㻀 㻁 㻂 㻃 㻄 㻅 㻆 㻇 㻈 㻉 㻊 㻋

では、だとすると〈電子の本〉を読む道具としての現行の電子本リーダーは？

ざんねんながら、この新しい道具がそのまま鋏や箸のような日用品になりうるとは、とても思えません。なかでも決定的なのが「使ふのに専門的な知識が必要でない」という最低限の条件を充たせずにいることです。〈紙の本〉なら幼いころに使い方をまなべば、一生そのままやっていける。

Ⅱ 電子本リーダーはそうはいかない。なにしろ、たえまない新製品の投入やハードやソフトのバージョンアップのたびに、老いも若きも、その使い方を練りかえし再学習するしかなくなるのですから。〈D〉

のみならず、そこまで読者に負担をかけながらも、個々の機能の反応のぶさにはじまり、コピーやメモの保存すら満足にできないという致命的な欠陥まで、さまざまな問題点がいつこうに解決されないまま時がすぎてゆく。

もちろん技術的な困難もあるでしょうが、それ以上に、「これが電子本リーダーなのだ」という基本の形がきまり、「これさえあればもう十分」と読者が感じるようになれば、肝心の商品の売れ行きはいやおうなしに激減せざるをえない。そちらの恐れのほうがはるかに大きい。

Ⅲ 、そうさせないために新製品の発売やバージョンアップを頻繁におこない、他社製品との激烈な競争を勝ちぬくべく、ハデな宣伝でユーザーの欲求を煽りつつける。つまるところ、アップルやグーグルやアマゾンに代表される今日のグローバルIT企業にとっては、^④みずからの商品を鋏や箸なみの枯れた日用品として成熟させずにいることこそが、安定した経営の必須条件なのです。〈E〉

さて、するとうなるか。

いまもいったように、吉田健一という単純で堅固な日用品としての本を欠いては、私たちの「本を読む楽しみ」は成立しません。しかるに〈電子の本〉にはそうした安定を保証する力がない。となれば結論はひとつ。人びとが落ちついた読書の習慣をじぶんから放棄してしまわないかぎりには、〈紙の本〉がその役割を担いつづけてゆくしかないのです。

（津野海太郎『読書と日本人』による）

問一

 に入る語として最も適切なものを次のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上用いてはいけません。

- ア
- そこで
- イ
- もしも
- ウ
- すなわち
- エ
- でも
- オ
- あるいは

問二 本文中には次の文が省略されている。〈A〉～〈E〉のうち、次の文が入る箇所として最も適切な箇所を選び、〈A〉～〈E〉の記号で答えなさい。

とはいうものの、いったん出現してしまったからには、まったくないものと見なすこともできない。はてさて、このやっかいな事態を私たちはいったいどう理解したらいいのか。

問三 — 線①「あれは「電子本」ではなく「電子本ビジネス」の「元年」というべきだったのです。」とありますが、どうしてですか。わかりやすく説明しなさい。

問四 — 線②「そうである以上、こんな頼りない本に〈紙の本〉の読書に親しんだ人びとがたやすく心身をゆだねてしまえるわけがない。」とありますが、〈紙の本〉に信頼をおく理由を「定着」という語句を用いてわかりやすく説明しなさい。

問五

 ・

 に入る語の組み合わせとして最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- | | | |
|---|------|------|
| ア | a…開発 | b…消費 |
| イ | a…優劣 | b…共存 |
| ウ | a…需要 | b…供給 |
| エ | a…分類 | b…依存 |

問六 ― 線③「本を読む楽しみ」とありますが、それを説明したものとして最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 破損するまで読み込むことで、自分だけのものであるという充足感を得られるもの。
- イ 複数の本から様々な知識を取り入れ専門性を深めることができるもの。
- ウ 専門的な知識がなくても繰り返し読むことができ、人生に面白みをもたらしてくれるもの。
- エ 紀元前からの記録や物語を好きなときにどこでも見ることができるもの。

問七 ― 線④「みずからの商品を銕や箸なみの枯れた日用品として成熟させずにいることこそが、安定した経営の必須条件なのです。」とありますが、安定した経営のためにグローバルIT企業はどのようなことを行っているのですか。適切なものを次のア～オから二つ選び記号で答えなさい。

- ア ユーザーが購入したデータを企業が消さずに残し続ける保証をすること。
- イ 宣伝活動を行うことでユーザーの購買意欲をあおること。
- ウ どの媒体を使っても単純で同じような使い方ができるようにすること。
- エ 絶えず新製品の発売やバージョンアップを行うこと。
- オ 壊れやすいが、安価で手に入れやすいものを開発し続けること。

問八 次のア～オのうち〈紙の本〉の特徴であるものにはAを、〈電子の本〉の特徴であるものにはBを書きなさい。

- ア 読者に負担をかけながらも、問題点が解決されていない。
- イ 墨やインクで書かれたものを長期的に保存することができる。
- ウ 専門的な知識を必要とせず、誰もがいつまでも使うことができる。
- エ 基本の形が決まっておらず、繰り返し使い方の再学習が必要になる。
- オ 一つの物体として長期保存することができない。

【三】 次の問いに答えなさい。

問一 次の文の「が」と同じ使い方をしているものをア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

こだわりの豆から抽出されたコーヒーが美味しい。

- ア チーズケーキも良いがモンブランも捨てがたい。
- イ 雨が降ろうが風が吹こうが行くつもりだ。
- ウ おもしろかった映画の原作の小説が読みたい。
- エ 彼女はふだん穏やかだが怒らせると怖い人だ。
- オ 母校には友人と過ごした思い出がたくさん詰まっている。

問二 次の傍線部の述語(述部)に対応する主語を、一文節で書き抜いて答えなさい。

計画的にお小遣いを貯め続けた結果、私はついに念願の一眼レフのカメラを買うことができた。

問三 次の□にア～オのいずれかを入れてことわざ・慣用句を完成させるとき、一度も使わないものを一つ選び、記号で答えなさい。

- 二の□を踏む
- を冷やす
- に泥を塗る
- にはさむ

ア 顔 イ 頭 ウ 足 エ 手 オ 耳

問四 次の□にア～コのいずれかを入れて類義語を完成させるとき、①～④に入るものをそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

厚意	〓	①
虚構	〓	③
		④

語群

ア	嘘	イ	架	ウ	慮	エ	切	オ	遠
カ	親	キ	仮	ク	有	ケ	空	コ	温

問五 次のア～エの文の順序を整えて意味の続きがはつきりした文章にするには、どのような順序にすればよいですか。はじめから順に記号で答えなさい。

ア 一方で過去、現在、未来という歴史の流れのなかで、人類がはたして進歩してきたのか、過去の人類が現代の人類より劣っていたのか。この点については、慎重に検討する必要があります。

イ 歴史は日々積み重なり、更新されています。このことを疑う人はいないでしょう。

ウ 遺跡からは長く安定的な共同体が維持されていた形跡も見られ、変化する自然環境との調和した生活は現代の目指しているもののひとつでもあります。

エ 縄文時代を考えてみましょう。縄文式土器を見ても、そこには土器製作の技術力だけでなく、装飾のオリジナリティや高い精神性が感じられます。

【四】 次の①～⑩について、——線の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直しなさい。

- ① 天皇陛下にお目にかかる。
- ② 除雪作業を行う。
- ③ 多くの経験を経て、自信がついた。
- ④ 彼女は度胸のある人だ。
- ⑤ 青磁の美しい器。
- ⑥ シュシヤ選択をする。
- ⑦ 学級ニツシを書く。
- ⑧ セイゾンを確認する。
- ⑨ リーダーの役割をツトめる。
- ⑩ 古くからのチキと再会する。

國語

2月1日 P M

得点

解答用紙

2025
(令和7)年度

国語
東大・医進クラス
2月1日 PM

(35)

二

問一

A 2

工

B 2

ア

C 2

イ

問二 3

ウ

問三 3

工

問三 3

工

問四 3

ア

問五 3

ウ

問六 3

工

受験番号

--	--	--	--	--

座席番号

--	--	--	--	--

得点

--	--	--	--	--

(35)

二

問一

I 2

ウ

II 2

工

III 2

ア

問二 3

〈B〉

問八

ア 2

オ 2

(順不同)

問七

3 ii 2 2 ii 2 i 4

自分「日陰」側の立場になる勇氣

「日陰」も「日陰」も関係ないのかもしれない

「日陰」側の立場にいる方がよい

問三 5

「Kindle」の成功によって、ビジネスにならないと考えられていた電子本が商品として成り立つとわかったから。

問四 6

紙の本はテキストや画像を長期にわたって物理的に定着させることができるから。

問五 3

イ

問六 3

ウ

問七 2

イ

工 2

(順不同)

問八

A 1

B

イ 1

A

ウ 1

A

エ 1

B

オ 1

B

(20)

三

問一 4

オ

問二 3

私は (完答)

問三 4

工

問四

① 2

力

②

工

③ 2

イ

④

ケ

問五 5

イ→ア→工→ウ

(10)

四

① 1

へいか

② 1

いよせつ

③ 1

へて

④ 1

どきよう

⑤ 1

せいじ

⑥ 1

取捨

⑦ 1

日誌

⑧ 1

生存

⑨ 1

務める

⑩ 1

知己